

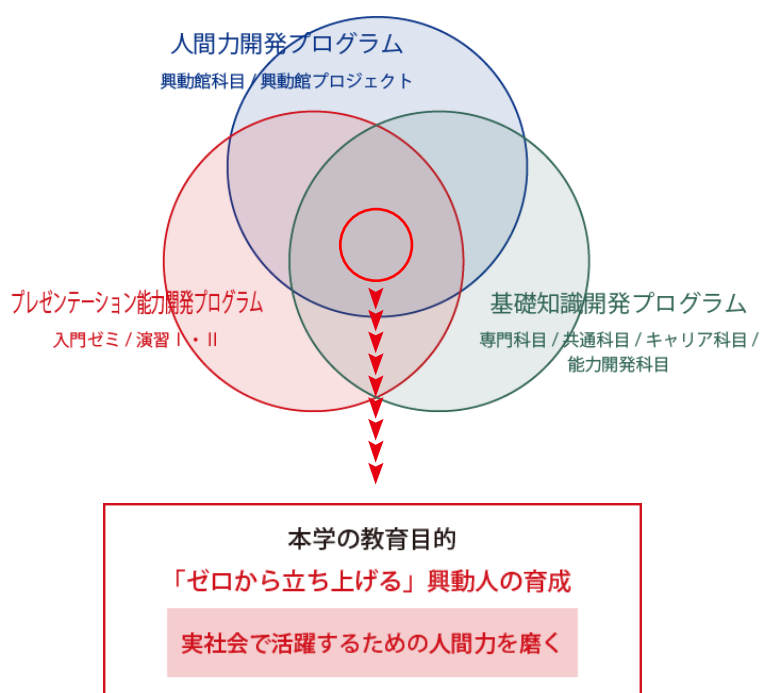
IV. 特記事項（興動館教育プログラム）

（本学の教育目的）

大学時代は、学業や課外活動など、さまざまなことにチャレンジするなかで、自分の進むべき道を明らかにし、それを実現するための知力や人間力を養う時期である。

そこで、本学は教育目的として「ゼロから立ち上げる」興動人を育成することをうたっている。興動人とは、ゼロからものごとを考え、失敗を恐れず、他者と協働して「何か」を成し遂げることができる人材を指すわが大学発案の新造語である。

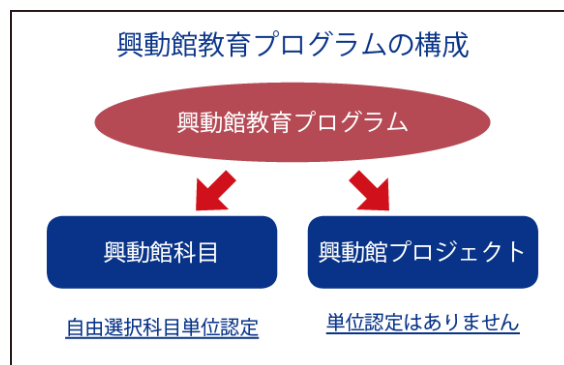
本学では、「基礎知識開発プログラム」「人間力開発プログラム」「プレゼンテーション能力開発プログラム」という3つの教育プログラムを用意し、学科に関係なく、すべての学生を「ゼロから立ち上げる」興動人を育てることを教育目的にしている。



（興動館教育プログラム）

本学では、日本の大学における社会科学系の講義を主体とした教育が、社会が期待する人材を十分に育成しきっていないことを認識した上で、平成 16(2004)年 4 月から新しい効果的な社会科学教育プログラムについて検討してきた。そして、平成 18(2006)年度から「ゼロから立ち上げる」興動人の育成を教育目的に掲げ、社会科学系の大学教育を抜本的に見直す新しい教育プログラム「興動館教育プログラム」を全学的にスタートさせた。

このプログラムは、対話やプレゼンテーション、実体験を重視し、学生の自主性、可能性を引き出す教育手法を取り入れた「興動館科目」と、「国際交流」「社会貢献」「地域活性」「経済活動」等の分野において、学生が主体的に企画・交渉・予算管理などに取り組み、多種多様な人間と共に何事かを成し遂げることを重視した「興動館プロジェクト」の2つの柱から成り立っており、この取り組みにより、本学の教育目的である「ゼロから立ち上げる」興動人に必要な「人間力」を育成する。



大学教育に対して基礎的学力・専門的学力を活用するために必要な「コミュニケーション能力」「協調性」「主体性」「チャレンジ精神」「誠実性」など、さまざまな社会的な基礎力のニーズが高まっている現状に鑑みても、「人間力」の涵養を目的とした興動館教育プログラムのもつ意味は小さくない。

本学の取り組みは、他大学をはじめ教育各界からも注目されており、平成 19(2007)年度を例に挙げると、①日本福祉大学(平成 19(2007)年 3 月 28 日)、②岡山大学(平成 19(2007)年 11 月 7 日)、③武蔵野大学(平成 19(2007)年 12 月 5 日)、④北星学園大学(平成 19(2007)年 12 月 12 日)、⑤東京家政大学(平成 20(2008)年 3 月 4 日)、⑥中部大学(平成 20(2008)年 3 月 10 日)、⑦愛媛大学(平成 20(2008)年 3 月 25 日)、⑧敬愛大学(平成 20 年(2008)6 月 20 日)の各大学からの視察があり、また、依頼を受けて、①大学行政管理学会西日本支部主催の職員・教学研究会(平成 19(2007)年 6 月 16 日、甲南大学岡本キャンパス)、②IDE 大学協会中国四国支部主催 IDE 大学セミナー(平成 19(2007)年 8 月 29 日、ホテルグランヴィア広島)、③日本私立大学協会主催大学教務部課長相当者研修会(平成 19(2007)年 10 月 18 日、メルパルク名古屋)、④日本私立大学協会主催大学就職部課長相当者研修会(平成 19(2007)年 11 月 8 日、オークラアクトシティホテル浜松)、⑤広島県高等学校教育研究会広島地区進路指導・キャリア教育部会(平成 20(2008)年 3 月 17 日、広島県立五日市高等学校)などで、興動館教育プログラムに関する情報提供を行った。

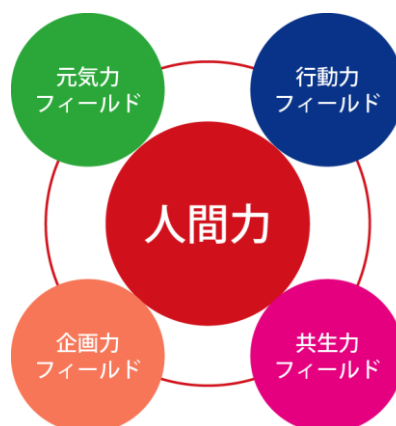
(興動館科目)

興動館科目では、「人間力」を構成する要素として「元気力」「企画力」「行動力」「共生力」の 4 つの力を設定し、その力を学生に身につけさせるための領域として 4 つの力に対応する 4 つの「フィールド」(「元気力フィールド」「企画力フィールド」「行動力フィールド」「共生力フィールド」)を設定している。

各「フィールド」では、それぞれに「達成されるべき目標」を明示して、その目標に近づけるべく授業を実施することとなっており、「フィールド」に配置された授業を担当する教員は、「フィールド」にそった「達成されるべき目標」を掲げ、目標に近づけるための方法を工夫して授業を展開している。

本学では、この 4 つの力の総和を「人間力」と定義している。

興動館科目の概念図



また、興動館科目は自由選択科目として位置づけられているため、学科や学年の垣根を越えてさまざまな学生の授業履修が可能であり、1年次から4年次までの「異学年」「異学科」の学生が集う結果となっている。授業運営においては、①少人数（50人以下、実際は30人程度）、②双方向授業、③体や手を動かす、④グループワークやフィールドワーク重視、⑤発表（プレゼンテーション）重視の5つの条件を掲げており、学生が能動的・主体的に「体験・参加」する「創成型学習」をめざす授業となっている。めざすところは、「教える授業」から「学びを生む授業」、インプット以上にアウトプットを重視する授業、結果以上にプロセスを重視する授業であり、教員はコーディネート的な役割を担い、ときにチーム・ティーチング方式も採り入れながら、履修学生を主役とした「ともに学びあい・つくりあげる」教育を行っている。

初年度（平成18(2006)年度）における興動館の科目数は20科目（内訳：元気力フィールド6、企画力フィールド・行動力フィールド各5、共生力フィールド4）、履修学生数は前期が10科目212人、後期が10科目298人、通期で510人を数えた。平成19(2007)年度は、科目数が新規開講6科目、閉講1科目（担当者退任による）で25科目（内訳：元気力フィールド7、企画力フィールド5、行動力フィールド7、共生力フィールド6）で、リポート科目を含めると29クラスに増加し、同年度の履修者数は、通期で711人にのびた。さらに、3年目となる平成20(2008)年度については、総科目数が31科目（元気力フィールド7、企画力フィールド8、行動力フィールド8、共生力フィールド8）となり、リポート科目を含めると39クラスにまで増加し、前後期あわせて1,152人の学生が履修している。

学生による興動館科目の授業アンケートにおいては、授業内容に対する「満足度」に止まらず、履修者自らが「意欲」「企画力」「行動力・実践力」「協調する力」「問題発見力」「発想力」「自己表現力」「他者理解力」の諸力向上をどのように「実感」しているかについて「自己分析」を求めている。また、授業アンケートにおける履修生からのコメント（自由記述）については、授業成績確定後に各教員がそれを受領し、すべてに対して返信することとしており、教員と履修者の「人間関係」を深めることを通じて、履修生の「達成感」や「共感」を高めることにも努めている。

以上のような取り組みの結果、興動館科目は、履修学生から一定以上の評価を得ている。平成 19(2007)年度通期 29 講座の授業アンケートにおける履修生の回答をみたとき、「大いに満足」「満足」の割合が 85%、「やや不満」「不満」の割合は 2%程度の数値となっている。さらに、興動館科目の履修生が新規のプロジェクト活動を立ち上げたり、既存のプロジェクトに参加したりするなど、興動館プロジェクトとの連関性も整備されつつあり、科目で伸ばした「人間力」をプロジェクト活動によりさらに培うという方向性も生まれている。

(興動館プロジェクト)

興動館プロジェクトは、「ゼロから立ち上げる」興動人に必要な「人間力」を、実践を通じて涵養していく教育プログラムである。その特色の一つは、通常のゼミの単位や学年・学科の枠を超えて学生が集い、一人ひとりが主体となって新しい企画や目標を掲げて「ゼロから立ち上げる」体験を仲間と共有するところにある。そして、直面する課題や失敗体験を少しずつクリアしながら、目標達成を目指して実践活動に取り組む中で、社会で役立つ「人間力」を培っていくことねらいとしている。

また、興動館プロジェクトは、興動館科目との連携にその特色があり、履修学生が興動館科目の 4 つの「フィールド」で学んだ諸力をプロジェクト活動の立ち上げや遂行に生かしたり、プロジェクト活動を行うことで生まれた「気づき」から興動館科目で学び直したりする教育方法を想定している。すなわち、興動館科目を含む興動館教育プログラムは、いわゆる PBL (Project Based Learning) の考え方に基づく教育プログラムともいえる。

興動館プロジェクトの活動拠点は、キャンパスに隣接する「興動館」で、プロジェクト参加メンバーが活動に利用可能な専用ブースやパソコンやインターネット回線も設置され、プロジェクトメンバーはこれらを自由に活用できる。プロジェクトの活動内容は、国際交流、社会貢献、地域活性、経済活動などで、プロジェクトの準備・実行はもちろん、企画、交渉、予算管理、報告、発表などの全般について、学生が主体となって活動している。特に、興動館プロジェクトでは、学生が地域社会・国際社会の人々と連携しながら活動することで、社会で役立つ多くの実践的な知識やスキルを習得し、また多様な集団と共生し、それをまとめる能力も養成していく。

そして、学生主体の興動館プロジェクトを教育プログラムとして成立させるために不可欠なのが、本学教職員からなるコーディネーターの存在である。コーディネーターは、学生によるプロジェクトの「種」(アイデア、プラン)が「公認」されるように必要に応じてアドバイスをを行うほか、プロジェクト始動後も、あらゆる局面で学生のプロジェクト活動を「指導」「サポート」することとなっている。

興動館の外観



興動館 2 階 プロジェクトスペース



プロジェクトの種類は、大学が主催して学生が運営する「主催プロジェクト」と、学生自らが申請して行う「公認プロジェクト」「準公認プロジェクト」に大別される。さらに、「公認プロジェクト」「準公認プロジェクト」については、参加人数 50 人以上のものは「公認プロジェクト A」、20 人以上のものは「公認プロジェクト B」、5 人以上 20 人未満のものは「準公認プロジェクト」として申請することが可能である。プロジェクト活動申請の目的・内容に関するプレゼンテーションが審査会の審査を受け、最終的に興動館運営委員会の承認を得た上で、プロジェクトのスタートとなる。また、活動中に参加人数が基準を満たした場合は、昇格審査を受けて、それぞれ昇格することも可能である。

なお、プロジェクトに必要な費用は、プロジェクトの種類によって定まっており、審査会の評価と興動館運営委員会の承認を得て、大学が援助することとなっている（「公認プロジェクト A」に対しては最高 1,000 万円、「公認プロジェクト B」に対しては最高 500 万円までとする）。

平成 20(2008)年度は、4 つの「主催プロジェクト」、6 つの「公認プロジェクト B」、10 の「準公認プロジェクト」、の合計 20 のプロジェクトが活動しており、参加学生は、約 350 人となっている（平成 20(2008)年 6 月末現在）。このようなプロジェクト活動を通して、学生は元気力・企画力・行動力・共生力とその総和である「人間力」を培いながら、総合的な成長を遂げている。

《 主催プロジェクト 》

1. インドネシア国際貢献プロジェクト



このプロジェクトは、本学の姉妹校であるインドネシア共和国のガジャマダ大学の学生とともに、災害復興支援や教育支援等の活動を行い、インドネシアへの国際貢献を目指す国際交流プロジェクトである。これまでの大きな取り組みとして、平成 18(2006)年 5 月に発生した「ジャワ島中部地震」で被災した人たちに対する復興支援活動がある。地震発生直後から、募金活動や支援物資の輸送を行い、同年 9 月にはプロジェクトメンバー 7 人が被災地のジョグジャカルタを訪問し、現地で約 3 週間の支援活動を行った。活動内容は、「子ども支援」「学校建設支援」「ビジネス支援」の 3 つ分野であり、これらの活動が同地区で有機的に結びつき、より高い効果を得ることができた。翌年 8 月には、メンバー 15 人が現地を再訪問し、前年の経験をベースに、被災の実状に応じた支援活動を行った。

また、国内での活動として、インドネシアに製造を依頼したチームのオリジナル商品の販売や、高校や各種イベントで、現地での活動内容の紹介などを行った。現在、インドネシアの「ジョグジャカルタ」を活動の中心としているが、今後は、これまでの実績を活かし、他の地域での活動を検討している。

2. カフェ運営プロジェクト



カフェ運営プロジェクトは、学生が主体となって「カフェの運営」に取り組み、経営のノウハウを実践的に学ぶことを目指す経済活動プロジェクトである。そのプロジェクトの拠点となるカフェ（店舗）は、興動館1階にあるHUE Café Timeである。Café Timeは、平成20(2008)年4月でオープン2周年を迎える。Café Timeの経営理念は、「カスタマーファースト ～地域

とともに～」である。Café Timeは、現在、地域の交流の場として、地元の人々に親しまれるカフェを目標として活動している。

Café Timeの1年目の課題は、地元の人々にカフェの存在を知ってもらうことであった。そのために、音楽イベントをはじめ、各種イベントを開催するほか、メディアにも積極的に登場するように努めた。また、メニューの開発にも力を注いだ。こうした取り組みが実を結び、来客数が増えてきた。2年目の課題は売上を伸ばすこととした。Café Timeに興味をもってもらえるイベントを次々に企画・実施するほか、メニューの改善も行った。その結果、売上を初年度の倍近くまで伸ばすことができた。3年目となる今年は、さらなる売上増を目指すとともに、共同イベントの企画、広報活動の見直し、内装の改装などに取り組み、地元の人々に親しまれるカフェとなるように取り組む。

3. 子ども達を守ろうプロジェクト



社会貢献分野で活動中の「子ども達を守ろうプロジェクト」は、近年、子ども達が犯罪に巻き込まれる事件が多発している現状を受け、地域の子どもの安心して暮らせる町づくりに貢献することを目的に活動している。地域の学校や住民の人々と連携しながら、学生の立場・視点から何ができるかを模索検討し、実際に行動することを大切にしている。現在、力を入れて毎

日取り組んでいる活動は、「ガードボランティア」である。これは、近隣の広島市立祇園小学校において実施している活動で、平日の昼休憩時間に学生が校内を見回ったり、校庭で子ども達と一緒に遊んだりすることによって、不審者が校内に入れない環境や雰囲気を作り上げて学校から感謝状を贈られた。同小学校以外でも、地域の児童館において絵本の読み聞かせや各種イベントの手伝うことによって、子ども達の「心を守る」ことも視野に入れて活動している。今後も、子ども達との遊びや地域の方々との交流を通じて、地域の安全性を高める活動を積極的に行っていきたい。

4. 武田山まちづくりプロジェクト



地域活性分野で活動中の「武田山まちづくりプロジェクト」は、本学のある広島市安佐南区祇園町のシンボルであり、歴史的にも由緒ある武田山の自然を守り、その魅力を広く伝えることによって、自然への理解や人々と交流を促進し、地域の活性化につなげることを目指している。活動内容としては、山の清掃や整備、本学学生や地元小学生を対象にした登山イベントの

開催などがある。また、学外でも、武田山を拠点に活動している環境 NPO と協働で「武田山フォーラム」を実施し、武田山の理解を深めるイベントを開催したり、全国の学校が連携して自然環境保護に取り組む「一学一山運動」に参加したりして、プロジェクトの活動も、地元だけではなく県外や海外での活動へと広がりをみせている。

《公認プロジェクト B》

●中国植林プロジェクト

砂漠化が進行し、日本への「黄砂」とも関連する中国モンゴル自治区で植林活動を実施し、地球環境保護に貢献することを目指すプロジェクト。

●ダンスを通じて見つける自分の未来プロジェクト

地元の公民館でダンスイベントを開催し、クラブ活動などに取り組んでいない地元の中高生に何かを始める「きっかけ」を与え、また公民館行事などにも積極的に参加して地域活性化を目指すプロジェクト。

●中高生の夢・笑顔実現!! プロジェクト

不登校の中高生をサポートするプロジェクト。多くの交流会やシンポジウムを開催し、平成 20(2008)年 5 月国際ソロプチミスト広島より、「シグマソサエティ」の認証を受ける。

●Web 連携 みせ・まち・おこしプロジェクト

地元にあるさまざまなお店の情報を、お店の方々の協力の下、独自に構築した Web コミュニティサイトを通して学生目線で発信し、地域の元気力をパワーアップしよう! というプロジェクト。

●サクセスストーリー出版プロジェクト

広島にゆかりの企業のトップに学生の視点からインタビューを行って本にまとめ出版することを目指すプロジェクト。

●国際ナショナル・ヒロシマデー・プロジェクト

「非核国家」であるニュージーランドの人々と「平和」について考え、ヒロシマデー活動の連携をはかることを目指すプロジェクト。

《準公認プロジェクト》

●地域活性化プロジェクト Fan Loving People HIROSHIMA

地域球団である広島カープやサンフレッチェ広島など広島のプロスポーツチームを応援しつつ連携し、地域活性化をめざすプロジェクト。

●食生活支援プロジェクト

大学生の健康的な食生活を提案し、学内での刊行物や地域の食堂と連携などで、学内外で学生の食生活を支援するプロジェクト。

●感性豊かな街づくりプロジェクト

アカペラのコンサートを定期的で開催し、広島を音楽と文化に満ちあふれた活気ある街にすることをめざすプロジェクト。

●経大ご近所 MaP 制作プロジェクト

学生による地域密着型の情報発信システム（web・活字・映像）の構築を目指し、地域活性化をはかるプロジェクト。

●太田川キレイキレイプロジェクト

太田川やその周辺の定期的な清掃活動に取り組み、「水の都」ひろしまを目指すプロジェクト。

●防災・防犯プロジェクト

地域の公的機関や住民、さらには近隣他大学の学生と連携し、「地域安全マップ」の製作をはじめ、防災・防犯を目的としたボランティア活動に取り組むプロジェクト。

●一緒に学ぼう!! ディベートプロジェクト

小学生や地域の人びとを交えたディベート大会を開き、コミュニケーション能力の向上をはかることを目指すプロジェクト。

●授業改善プロジェクト

他大学の授業を視察・分析し、また、教員・学生へのアンケートを行うなどして、本学授業の改善を学生の視点で目指すプロジェクト。

●広経大イイトコ発見プロジェクト

本大学の“イイトコ”を発見し、ビデオ、チラシ等で情報を発信、学生の生の声で紹介する。そのことで、在学生や新入生に大学を好きになってもらおうというプロジェクト。

●地域発掘プロジェクト

学生の目線で、それぞれの出身地の名産品や特産品を調べ、ホームページやブログで紹介する。経大生出身地の“ご自慢物産展”を開催し、ブランド開発、販売等を行うプロジェクト。

《 興 動 祭 》



興動祭（平成 19 年 10 月）

以上のプロジェクトのほか、地域との連携がより深い活動や、プロジェクトの枠を越えた活動も行われるようになってきている。平成 18(2006)年 10 月に誕生した「興動祭」は、地域住民や他のプロジェクトメンバーと一緒にお祭りを作ってみたいという学生有志が集まり、考案・企画された取組みである。内容は、各プロジェクトや参加した地域の団体の特徴を活かした催し物となっている。1 年目となる平成 18(2006)年度のお祭り当日には、地域住民や大学関係者など約 500 名の来場者があり、広島市が奨励する「千客万来賞」を受賞した。平成 19(2007)年度は、石田学園創立 100 周年、広島経済大学開学 40 周年を記念イベントのひとつにまで成長し、来場者も約 1,200 名と飛躍的に伸びた。

興動館プロジェクトでは、1 年間の活動が終わると、「プロジェクト認定式・修了式」が行われる。この認定式・修了式で、プロジェクト活動に協力した企業や地域の方々および教職員や学生に対して、プロジェクトの活動報告が行われる。このような外部評価を受けることを通して、プロジェクト活動は、さらに発展することができる。

《 プロジェクト認定式・修了式 》

興動館プロジェクトでは、1 年間の活動が終わると、「プロジェクト認定式・修了式」が行われる。この認定式・修了式で、プロジェクト活動に協力した企業や地域の方々および教職員や学生に対して、プロジェクトの活動報告が行われる。このような外部評価を受けることを通して、プロジェクト活動は、さらに発展することができる。



興動館プロジェクト認定式・修了式（平成 20(2008)年 1 月）

（興動館教育プログラムをさらに発展させるために）

全学的に「ゼロから立ち上げる」興動人を育成するため、現状において、教育・学習支援センター、インターンシップ推進室、国際交流室、興動館など、学生の教育支援を行う部署との連携不足を改善し、情報を共有化するとともに、相互に機能の補完を図っていく。興動館科目に関しては、FD(Faculty Development)を含め教育・学習支援センター機能との連携、興動館プロジェクトに関しては、国内外の活動において、インターンシップ推進室、国際交流室などとの機能連携をさらに強化することで、興動館教育プログラム遂行にも大きく寄与することとなる。そのため、各部署のスタッフが研修会を開き、「ゼロから

立ち上げる」興動人を育成するための意識統一を図り、相互に補完すべき点を検討して、施設運営に止まらず、各プログラムの実施や学生対応を行っていく。

興動館科目については、履修生の授業評価は概ね良好ではあったものの、興動館科目履修学生数は全学生数からみた場合、その割合は大きくはない。また、バラエティに富んだ授業科目・内容をもつ興動館科目ではあるが、その授業科目や授業方法の実態が「フィールド」の概念に則したものとなっているか、その確認作業が必要とある。そして何より興動館科目が学生の「人間力」をどこまで醸成できたかについて検証するため、さまざまな指標を用意するという重要な課題が残っている。

今後の課題としては、興動館科目創造センターを中心に、興動館科目の授業実践事例・データを積み重ねて総括し、興動館科目担当教員のみならず全教職員の認識の深化・共有化を図る作業を行う。具体的には、興動館科目の各授業における試みや成果などに関する研究会を設置・開催し（現在は興動館科目担当者会議を年2回開催）、担当教員間でフィールド内・フィールド間の連携をはかっていくことに加え、公開の授業報告会を開催するなどして、いわゆるFDの取り組みを強化していく。また、興動館科目数を漸増させることで本学学生が興動館科目を受講できる「受け皿」を広げていくとともに、興動館科目と学科科目・共通科目との相互関連性を再検討し、それを興動館科目の授業シラバスなどに明記して学生の科目履修に示唆をあたえていく。

一方、興動館科目には、興動館プロジェクトへの動機付けや、興動館プロジェクトの実践に役立つ「知の技法」の習得などの役割が存在する。そのため、年度ごとに興動館プロジェクトとの連携を図りつつ、新規科目の設置や現行科目内容を再検討し、できるだけ柔軟な対応をとっていく。

興動館プロジェクトにおいては、参加者が年々増加しているものの、現状では全学生数に対して約5%までに止まっている。学生達が積極的にプロジェクトに参加することを促すため、今後は新入学生セミナーでの導入教育、「入門ゼミ」でのガイダンスなど、初年次教育においてプロジェクトの理解を深めるプログラムを実施する必要がある。

興動館プロジェクトと興動館科目との関係については、授業科目「プロスポーツによる広島活性化講座」と「地域活性化プロジェクト Fan Loving People HIROSHIMA」、授業科目「防災まちづくり実践講座」と「防災・防犯プロジェクト (Volunteers in Community)」、授業科目「楽しく学ぼう！ディベート」と「一緒に学ぼう！ディベートプロジェクト」など、両者が相互に作用している事例もみられるが、今後も多くの学生が地域社会との関係を深めつつ、社会貢献や地域活性につながるプロジェクトを数多く立ち上げ、実践してくれることを望んでいる。

また、興動館プロジェクトの成果についても、現状実施している参加学生による報告書作成やプロジェクトの「達成度」に関する自己評価シートに止まらず、地域社会や企業などからの第三者評価を導入する必要性もあり、この点も現在検討中である。